

就職面接学歴を痛感

ここにいろよ

沖縄子どもの貧困

第2部 親は・・・(4)

⑤

ナミ(下)

の学校行事への参加を欠かさない

離島で高校3年と小学3年の娘と暮らすナミ(39)は、白身も母子家庭で育った。物心つく前から、両親が離婚。母はナミら子ども4人を一人で育てるため、賞物会社やスナックの仕事掛け持ちして、懸命に働いた。過労で吐血して、病院に運ばれたことも何度もあった。

母は、入学式も授業参観も卒業式も、仕事のために学校に来なかつた。「マーマーが働いてるから、おまえたちはごはんが食べられるんだよ」というのが口癖だった。

母親の苦勞を見て、わかまは言葉がなかつた。でも、かまってもええない親しさを知っていたからナミは、娘たちが口癖だった。

ナミは中学を卒業して15歳から、実父が経営する小さな建設会社で働き始めた。「高校はお金がある人が行くところ。行きなさい」と言われていた。重い資材を担ぎ、男性並に働いたが、身内だからか女だからなのか、最初の3ヶ月の給料は日当がわずかる辛内だった。生活していけず、夜は年輪を傷つけてスナックでバイトした。幼い弟のために、稼いだ金の半分を実家に入れた。

ナミが職場で出会ったのは、年上の男性と結婚、長女を出産したのが21歳のときだった。数年後に離婚。その後、32歳のとき未婚で次女を産んだ。



海外で暮らしたことがないというナミ(左)。「娘たちには広い世界を知り、自分とは違う人生を歩んで欲しい」と願っている

教育の機会平等にほしい

ナミは中学を卒業後、3回、高校の願書をもらいに行つたことがある。仕事と生活に追われ、結局、願書を出さなかつた。

長女が中学3年のとき、「高校に行かずに働きたい」と言い出したことがあった。ナミは高

校に行かずに働きたい」と思ってきたことは卒業しないと聞き

伏せた。就職で差別を感じてきた。「行けるなら、今でも高校に行きたい」という。

高校に通う長女はこの春、3年になる。「親貧困のためには、一つでも上の学歴を得ないといけない」。大学が専門学校に絶対行つて、「ナミは長女に口酸っぱく言っている。

長女は専攻、高校の実習助手や、税理士の仕事に興味を示している。そのためには、本県の大学が専門学校への進学が必要になる。

児童扶養手当を9万円の手当に上げる案が、学費を捻出する余裕はない。奨学金のほかに進学の道はないが、返済のいらぬ給付型の奨学金は狭き門。受けられるのはほんの一握りだ。娘には「奨学金を返さなくて」とハッパをかけている。

「貧困の連鎖を断ち切りたい」と何度も繰り返すナミ。「そのためには教育しかない。貧困家庭の子も平等に教育を受けられるチャンスがほしい」

(文中敬称略)
(子)子どもの貧困「取材班・高崎園子」
「火」木曜日掲載